The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嶋田厚編『現代デザインを学ぶ人のために』世界思想社1996 292P
Author(s)	渡辺, 真
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 116-117
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53302
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

嶋田厚編『現代デザインを学ぶ人のために』

世界思想社　1996　292P

渡辺　真／京都市立芸術大学

本書は，「……表題のとおり，何よりもこれからデザインを学ぼうとする若い読者のために編まれたものである。」と編者が書いているように，デザイン学生のための入門書ということになろう。ただしいわゆるデザイン概論的あるいはデザイン史的な入門書ではない。デザインを実践するにせよ，学問的に研究するにせよ，またデザイン教育に携わるにせよ，あくまでそれを実践してきた経験の立場から各自のテーマについて語ることを基本姿勢としている。つまり建築家，デザイナー，デザインおよびデザイン史研究者，社会学者など15人に及ぶ多彩な筆者を擁して，経験に則して語り，デザインの世界にいざなう形を取っている。こういう点に今日的状況に対しての敏感な反映を見て取れる。 最近の学生を相手にした場合，興味をもたせること自体の必要性が痛感される。学生が自ら興味を引き出すことはほとんど期待できず，「デザインに興味をもつデザイン学生」を育てることから今日の教育ははじまる。語られ，論じられる内容よりも，語り方，さらには語り手に対する関心の方が優位であるから，語り口そのもののあり方を工夫しなければならない。だから編者も言っているように，論文的構成というより，エッセイ集風の体裁を取っている。

安藤忠雄や勝井三雄の場合には嶋田のインタビューに答えるという形を取り，安藤は「住吉の長屋から」のなかで独学で建築家になった経移を語り，勝井は「視覚人間の軌跡」で大学時代にはじまりその後のグラフィック・デザイナーとしての活動や状況を振り返りつつ，日本のデザイン界について語っている。黒木靖夫の「企業内デザインのあり方への挑戦」はデザインの現場での実践を通じての話だし，須永剛司の「デザインの教室――出来事をデザインする」や宮崎清の「人心の華」および向井周太郎の「職業としてのデザイン」はデザイン教育の現場からである。それに少し珍しいのは，一人のデザイン史研究者の軌跡という形を取っている藤田治彦の「歴史のなかの現在」である。藤田はもちろん本意匠学会の会員である藤田氏である。デザイナーなどの場合は個人の活動を語ることは少なくない，というかよく活字になる。たとえば安藤や勝井のインタビュー記事，またソニーでのデザイン実践の歩みを振り返りつつ，デザインを論じた黒木靖夫の文章などはその良い例である。しかし研究者の研究軌跡をみずから活字にすることは珍しい。とはいえデザイン学生とは，すべてがデザイナーになるわけでもないし，私もそうであるがデザイン研究者が育ってほしいと望んでいる立場からすれば，デザインの研究に誘い込みたいという願望があっても不思議ではない。

内容的な面で気づくことは，デザインをモノにおける機能と美という関係において問題にするような古典的なデザイン観が影をひそめている点である。歴史的な問題でも，これまでのペブスナー流のデザイン史観の見直しの必要性を指摘するものが多い。生井英考は，モノの造形史ではなく「できごとのデザイン史」を提案し，吉見俊哉は「デザイン，あるいは感覚の政治学」において‘デザイン運動史からデザイン感覚の社会史へ’の転換の必

要性を説く。美術史的なデザイン史に対する見直しの経過については，藤田や吉見の論文のなかに詳述されている。柏木博の「近代デザイン＝近代はいかに問題にされたか」では，「誰もが等しく健康で豊かに生活できる生活環境」の構成，あるいは「新しい生活様式」の構想，プロジェクトという点に近代デザインの課題を読み取り，都市環境を代表とする生活環境のデザインをデザインの中心テーマに据える。嶋田厚の「デザインの森」も，トータルな環境形成史としてデザイン史を捉えていこうとしている。これらは工業製品に代表されるようなモノの造形としてのデザインを語るのではなく，生活や環境の形成史という視点であるが，それは単にデザイン現象を捉えるための視点にとどまらず，逆に社会現象を‘デザイン的に眺める’視点にもなる。たとえば柏木は，オウム真理教について，生活についての明確なプロジェクト，つまりデザインの欠如を指摘し，嶋田は，明治時代における文明開化や殖産興業の問題を日本における包括的な環境形成の問題とすることを提案している。

津金澤聰廣の「小林一三の私鉄沿線文化論」は，阪急・東宝グループの創設者である小林一三の宝塚戦略つまり，一方のターミナルに「宝塚新温泉パラダイス」（現・宝塚歌劇と宝塚ファミリーランド）を配し，他方にターミナル・デパート（阪急デパート）を置き，その間の沿線を田園都市として住宅地開発するという経営戦略を紹介するものである。ここでは経営戦略自体がデザイン実践として捉えられている。いわば本書の中心的なデザイン観の最適な実例ということになろう。その他大竹誠の「街へでてデザインを学ぶ」は，町に出ていって直接感じ，知り，スケッチし，整理するというフィールドワークの提案であるが，これもデザインを日常的な生活空間そのものから立ち起こそうという発想である。西川潔の「ノーフォク地方のビレッジサイン」は，彼自身によるフィールドワークの報告だが，単なる結果報告ではなく，むしろフィールドワーク，それに対する姿勢・気持ち，苦労や楽しさなどのドキュメントの意味合いを濃くもっている。宮崎も，長野県のある集落で暮らしつつ学ぶという体験学習を話題にしているが，そこで示そうとされているのは，生活文化としてのデザインである。

このようにスタイルにおいても内容においても，かつてのように概説的なものではもちろんなく，啓蒙書的，主義主張的でもなく，体験談的であるというのが本書の特徴である。その中で各筆者は新しい視座を求めてさまざまな提案や示唆を行なっている。一つ気になることを言えば，モノの造形を越えたところに可能性を求めるのに急で，モノの造形が果たす役割の問題が無視される結果となっている点である。大半のデザイン学生にとっては，都市計画的な規模の環境形成に直接携わったり，経営戦略を決定する立場に立てる可能性はなく，企業のデザイナーあるいはデザイン事務所のデザイナーのどちらにせよ，モノや情報の造形に携わることを期待される。ここからはじまる可能性が論議されるのではない限り，語りかけられ誘われているデザイン学生にとって，誘われている世界は自分たちが行くことのない世界という逆説が成り立ってしまうのである。